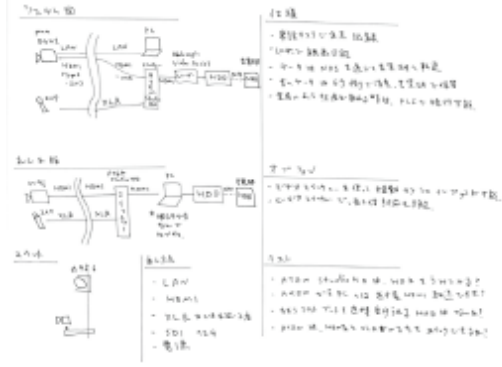


THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ

2022 年度活動報告



本稿では、THEATRE E9 KYOTO（以下、E9）と京都市立芸術大学芸術資源研究センター（以下、研究センター）の協働事業・研究として取り組まれている「THEATER E9 KYOTO 上演作品アーカイブ」プロジェクトについて記す。

主なアーカイブ作業の一つに、舞台作品の記録動画の撮影がある。これまで、20年度は京都市立芸術大学の学生に、21年度は、学生の他、広く一般にメンバーを募って実施した。1台の固定カメラによる撮影というシンプルな内容ではあるが、以下の問題が生じた。

1. 映像撮影の専門家ではないので、画面の傾き、機材の熱暴走など、動画の質やそもそも取れなかった事例のあること
2. 動画を撮影するだけでは、モチベーションが続かないこと
3. 撮影日の設定の困難

1については、想定される問題ではあるので予め劇団側には了承の上進めていたため決定的な問題ではない。2は、21年度の取り組みにおいて、モチベーションの問題及び積極的なアーカイブ研究という前向きな課題を前提に、アーカイブ資料を用いた作品の紹介やアーカイブ研究の可能性を探るアートイベントを企画した。だが、アーカイブ資料の取り扱い方について、資料提供者であるアーティストの一人から疑義と中止の要請がでた。アーティストとの対話の結果、当該イベントは中止となる。本件については、アーカイブされた情報の取り扱いについて、及び、その実施とマネジメントには更なるエフォートと環境を整える一定の資金が必要であることも課題として浮き彫りになった。3は、観客の動員が上演直前に判明するため、劇団側も日時設定の意思決定が直前になる傾向があり、人員の配置に支障が生じる。

上記課題の解決に向け、本年度は、固定カメラによる撮影について、劇場の照明バトン等につり下げ、常設とすることで簡易な撮影方法が可能であるかを検証した。

この検証に当たっては、京都芸大を卒業し、E9の技術スタッフで劇作家・演出家でもある駒優梨香氏が中心になり、村上花織氏がマネジメントを担当。横田宇雄氏、中谷利明氏、加藤文崇氏らベテラン・中堅の映像家3氏にも加わっていたが、プロジェクトチームを5月に結成した。7月にシステム図を作成。7月のE9アートカレッジ発表公演で試験的な撮影を行い、8月の劇団三毛猫座のゲネプロで本撮影を行った。

システムの概要は、客席側の照明バトンにカメラとマイクを設置。劇場事務所でも撮影オペレーションができるように遠隔操作を行う。

使用機材は、カメラ：BGH1

レンズ：LUMIX G X VARIO 12-35mm/F2.8 レコーダー：Blackmagic Video Assist マイク：MXL CR21

音声レコーダー：DR-701D

とし、ISO2500 固定、F7.2 で撮影した。

試験結果として、照度の低いシーンも綺麗に収録でき良い結果が得られた。また、遠隔操作も可能である。

課題としては以下がある。E9 の技術管理スタッフからは、「カメラが常設となると、照明やその他の機材との取り合いとなり、センターボタンでの設置は困難」「変形舞台の場合、カメラ位置の変更が必要」という意見があった。また導入費用として少なくとも 50 万円以上は経費がかかる。撮影のオペレーションが簡素化されているとはいえ、変化する状況に対応する人材の設置が求められる。

半数以上の上演団体は自ら記録撮影を用意している状況もあり、その映像などの資料提供でアーカイブは一定程度維持されている。常設カメラの設置については、上記課題とその需要と活用法の検討が必要である。

駒氏はじめ関係各位に改めて謝意を述べる。

あとうさとし